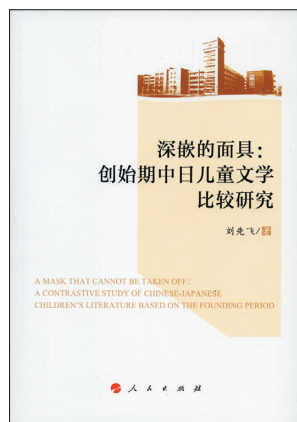


劉先飛

『取り外せぬ仮面——創始期中日児童文学比較研究』

劉先飛『深嵌的面具——創始期中日児童文学比較研究』

劉岸偉



人民出版社，2015年

今からおよそ九十五年前、周作人は「日本と中国」と題する一篇を書いて明治文学と中国の新文学との関係について、次の如き興味深いことを述べている。

明治文学史をひもといてみると、思わず呆然とせずにはいられない。恰も三十年先の中国文壇運勢をいちいち予言する推背図すいはいずを見ているような気がしてならない。言文一致、翻訳調、新体詩、文藝思潮の流派、小説と通俗小説、新旧劇の混合と断絶といったような過去の遺跡は、われわれにとつて目の前に繰り広げられている現実問題でないものは何一つない。（『京報副刊』第三九四期、一九二五年十月十日）

それは単なる歴史の偶然ではない。中国の近代文壇は明治日本から帰ってきた留学生たちによって築かれ、中国の新文芸が近代日本の洗礼を受けたことは紛れもない歴史的事実であった。さらにもう一つ見落としてはならないことは、十九世紀以降、西洋文明の挑戦に迫られて、それとの対決に立ち向かわざるをえない、中日両国の近代への転型という大きな文化的背景であろう。西洋文化受容と近代への転換という共通したバックグラウンドがあったからこそ、近代中国のもろもろの歩みを考察する際、日本はつねに一つの参照装置になっているのである。本書はまさにこうした「方法としての日本」を援用して、草創期中日児童文学の生成、発展の軌跡を考察した好著である。

周作人の言い方を借りれば、日本の児童文学発展史をひもとき、

先駆者の啓蒙活動、児童雑誌の創刊、教育制度の整備と作用、児童読み物の登場、文人による創作童話の誕生などのプロセスをみると、恰もそれより十数年後の中国児童文学の生成、変遷の軌跡をいちいち予告しているかのような錯覚を覚える。本書は作家間の影響関係や、あるいは思潮、流派の相互作用を実証する、という意味においての「比較研究」ではなく、むしろ一種の平行対照という手法で、各段階における双方の典型事例に基づいて、中日児童文学の生成、発展における連続と断絶、偶然と必然、内部要因と外部要因、また両者の差異などを整理分析することによって、

中国の児童文学の特性と不備を浮き彫りにしている。以下はその各章の内容を概観して、いささか評者の所感を述べさせていただけ。

第一章「啓蒙者の設計」では、福沢諭吉と梁啓超の啓蒙活動にスポットをあてて、『訓蒙窮理図解』や『新小説』などを解説する。国民の形成、国家の存立という視角から児童啓蒙の意味を捉える、という両者の共通点にふれるとともに、啓蒙教育の政治的側面、伝統的道德倫理を重んじる梁啓超と科学・実務を強調する福沢諭吉との違いを指摘した。

第二章「教科書と雑誌の間」では、教科書の補完として、児童雑誌誕生の背景を分析し、明治二十一年に創刊した『少年園』と中国早期の児童雑誌『蒙学报』を取り上げる。坪内逍遙、森鷗外、

尾崎紅葉、若松賤子、森田思軒などの大家からなる強力な執筆陣に支えられていた『少年園』に対して、葉瀚など発起人の数人による『蒙学报』の苦心経営という対比は、すでに中日両国における児童文学の盛衰消長を暗示している。

第三章「児童向けの叙事物語」では、まず巖谷小波の創作活動を考察し、その代表作『こがね丸』や「日本昔噺」シリーズ、「世界お伽噺」シリーズなどの作品を詳述する。それと並行して比較の対象として取り上げたのは、長年商務印書館に勤めた孫毓修の童話創作である。孫の主編した『童話』叢書は一九二三年まで十五年間刊行し続けた。どちらも商業出版の波に乗って現れた児童向けの読み物だが、小波と孫という作者個人の価値趣向、審美意識、伝統文化に対する取捨選択の異同を分析したあたりは興味深い。古今東西、来る者拒まぬという開かれた視野をもつ小波に比べて、児童教訓という側面を重んじる孫毓修は、伝統物語、小説を利用した際、神怪、幻想、虚構などの要素を極力排して、いわば「怪力乱神」を敬遠する態度をとっている。こうしたメンタリティの異同は、創作童話を扱う次章にも論じられている。

第四章は「現代文学と童話との出会い」と題して、小川未明と葉聖陶の童話世界に焦点を絞って比較考察し、著者の研鑽心得を記していて、本書の眼目の一つと言って良い。小川未明は日本児童文学の歴史に現れた画期的な書き手であった。その芸術的で詩

情豊かな創作童話は、それまでの説話のお伽噺とはそもそも別物である。一方、葉聖陶は「児童の発見」を説き、「人間の文学」を訴える文芸理論家周作人とともに、一九二〇年代に結成された「文学研究会」の同人の一人でもあった。彼の童話創作はいわばこのグループの文学観を代弁する性格をもっていた。二人の作品はヒューマニズムの息吹を伝え、弱者への同情や社会不平等に対する憤りを表しており、どちらも作品の道德教化の効用を意識している、と著者は指摘するが、しかし評者に見れば、児童をどう捉えるか、子供に向けた視線という点において、小川未明と葉聖陶との間に決定的違いがあるようにも思われる。第四章の第三節において、未明早期の「童話観」「児童観」ともいべき述懐が引かれている。

子供程ロマンチストはありません。誰でも一度は子供の時代があつたのです。どんな心の醜悪な人間でも、実利主義者も、また悪人も、ロマンチストであつたのです。(「童話の詩的価値」『定本小川未明童話全集』第一巻)

これは明らかに未明が傾倒していたラフカディオ・ハーンこと小泉八雲の影響であろう。一九〇四年三月から、早稲田大学文学科二年生の小川健作(未明)はわずか四か月だったが、ハーンの

英詩評論、英文学史講義を聴いて深い感銘を受けた。ハーンの講義内容のちに門弟らによつて筆録整理され公刊されることとなるが、一九二六年に北星堂書店から出たハーンの英文学講義録の一種『詩人と詩』(Poets and Poems)には、「子供についての詩」(Poems about Children)の一篇が初収録されている。講義の冒頭において、ハーンは田舎医者でもある英国詩人ロバート・ブリッジズの詩作「死んだ子に接して」(On a Dead Child)を取り上げた。純潔で「ちつとも疵きずもしみもない」幼い我が子の死体を抱えて、もし生きていれば、この子の前途に待ち受けている苦しみおもんばかを慮る親の胸の内をこう描いている。

Sense with keenest edges unused,

Yet unsteedled by scathing fire;

Lovely feet as yet unbruised

On the ways of dark desire;

Sweetest hope that lookest smiling

O'er the wilderness defiling!

(新しい刃の如き鋭敏な感覚、まだ容赦なき炎に鈍らされていない。

可愛らしい足は無傷のまま、暗き欲望の道に踏み出して。甘美な

希望は、汚れた荒野をほほえんで眺める)

ハーンはこの詩の含意をこう解釈している。

無垢で心の美しい子供は邪悪を知らず、すべての人を楽しませたいと願い、ほとんど神のような存在である。その世界にはまだ情熱もなく、憎しみも、妬みも、欺瞞ぎまんもない。すべては率直で、真実で、美しく、あの小さな心霊は繊細で優しい。しかしこれらの善良と美質はすべて壊されるに違いない。

なぜそうなるのか、ハーンの説明によると、子供はいずれ成長し、これまでと違う別の感情と感性を発達させなければならぬ。それは必ずしも良いものとは限らないし、とても悪いものもある。そして主要な理由はもつと単純で、つまりこの世界は邪悪なものだという。ハーンはさらにこう付け加える。「たとえば、申し分なく正直な人——子供のようには商業の世界でうまく成功できそうにない。申し分なく誠実な人——子供のようには誠実な人はすぐれた外交官が務まらないであろう」という。

この講義の最後に、ハーンは子供の顔にスポットをあてた興味深い詩を挙げた。この講義を行う数年前に亡くなった詩人フレデリック・ロッカー (Frederick Locker 1821-1895) が、我が子のあの「静かな青い目、遠くへ見据える、その不思議な目」を描いた詩作である。そして子供が顔に浮かべた「至上の静謐せいひつと最高の叡智えいちが

見える」その深遠な表情にふれて、ハーンは次のような連想と解説を付け加えた。

芸術家たちは遙か以前からこの事実気づいている。彼らの描く神々の顔に静かで穏やかな子供の微笑みを浮かべさせたのである。クリスチャン芸術家の中で、偉大なるイタリアの彫刻家ミケランジェロは、ある教会の内壁に描いた二枚の著名な天使の絵において、子供らしい静謐についても注目すべき研究を残した。これら天使の顔や身体は子供つばいものだが、これらの子供の目にすべての不滅の知恵、かつてあつた、現にある、あるいは今後もありうるすべての知識を見ることができぬ。

ハーンの英文学講義録はその文学批評の一環として、彼の批評家としての側面を知る上で重要である。「子供」の含意を解釈するこれらの文字の中に、実は彼の日本体験の片鱗が無意識に刷り込まれている。それはともかく、未明の「児童観」はハーンのそれに極めて近いと言える。未明の童話世界からは、その神秘性、暗さ、不気味さ、おどろおどろしさも含めて、「怪談」作家ハーンの感化の一端が読みとれるはずである。一方、葉聖陶も子供世界の「純真」「善美」を謳っているが、社会現実への関心が深まるにつ

れて、その作品も教訓の色彩を強めていく。児童はつねに感化と教訓の対象に過ぎないから、未明の作品に現れたような、「子供の心境」に寄り添う、自由奔放で、伸び伸びした想像と多彩の意匠は葉聖陶に期待できないのも頷かれるであろう。

草創期の中日児童文学の生成、発展の軌跡、代表的作家の事例を細かく比較考察した著者は、人間の感受性よりもその社会責任を重んじるあまり、中国の童話作家はつねに厳めしい、「取り外せぬ」仮面——説教面をかぶっている、と結論する。宜なるかな。元をただせば、かつて周作人が叱責した「文以載道」の流弊に由来していることは言うまでもない。

謹厳なる学術書だが、瑕疵として誤植がちらほら目につく。「他」が「她」になる（一三六頁）のはともかく、『蒙学報』発起人の一人曾広銓が「曾広荃」（八二頁）、「曾国銓」（一一五頁）になったり、平賀源内が「半賀源内」（二四四頁）と化けたりするところは、白米に混ざった砂利のようなもので、やはり摘みとつてもらいたいものである。